

2013年2月6日

研究員レポート：EUの農業・農村・環境シリーズ 第24回

(社)JC 総研 基礎研究部 客員研究員 和泉真理

第24回 次世代に美しい国土を引き継ぐ： 英国ノーフォーク・エステートのマネージャー

英国南部のサウス・ダウンズ国立公園中央部、国立公園とその南側の海岸地帯との境界近く、アラン川を見下ろすように建つ壮麗な城が、英国の筆頭公爵家であるノーフォーク公の居城、アランデル城である。城自体は1,000年近くの歴史を持ち、ノーフォーク公の居城となつてからも、850年以上の年月が流れる。城の周辺に広がる広大なノーフォーク公の所有地、すなわちノーフォーク・エステートを管理しているのが、マネージャーのピーター・ナイト氏である。



ノーフォーク・エステートはサウス・ダウンズ国立公園の中に広がっている。ダウンズとは英国南部に特徴的な石灰質でできた丘陵地帯のこと。

1 英国のエステートとマネージャー

ピーター・ナイト氏は24年にわたり、約2,000ヘクタールに及ぶノーフォーク・エステートの農地の経営を担当している。英国内には、このような中世の時代にまで遡るような歴史的経緯に基づいて貴族等が所有する広大なエステートがまだまだ多く存在する。ちなみに、ノーフォーク・エステート全体としてはこのサセックス地域で約3,500ヘクタールあり(他にヨークシャーにも所有地があるそうだが)、ピーター・ナイト氏が管理している土地以外は、多数の借地農に貸与されている他、一部はアランデル城の周辺に小さな町を形成している。

英国では、ノーフォーク・エステートのような歴史的に広大な土地を所有する王室や貴族、大学などの他、資産として農地を所有する銀行家、医者等も多い。有名なオックスフォード大学とケンブリッジ大学も大地主であり、両大学間の距離は150キロもあるのだが、昔は双方の大学の敷地だけを歩いて行き来できたと言われるほどだ。本シリーズの第18回「JC 総研欧州研修報告その2: 英国の大規模有機農場」で紹介したデイルズフォード農場も、実業家で貴族でもあるバンフォード卿の所有地である。

このような農村の地主達は、当然ながら農業政策への関心も高い。英国で政治力の高い農業団体というと、英国農業者組合(NFU)と農村部の土地所有者の団体である農村土地ビジネス協会(CLA)の2つが挙げられる。CLAはNFUとともに農業の繁栄と安定を追求する立場に立つが、バランスのとれた農村地域の発展全般を志向し、環境支払いを通じた農業支援への関心も高い。

農村の土地所有者が自ら農業を営まない場合には、農地の管理は近隣の農業者に貸すか、マネージャーを雇って管理を依頼することになる。マネージャーは、農業経営のみならず、敷地内の建造物の管理、借地農との契約関係の構築といった幅広い業務をこなすこともある。農業者向け雑誌の広告欄には、マネージャー募集の広告が並ぶ。マネージャーに応募するのは、より条件の良い農地での経営を希望する農業者や、農業者の次男、三男などである。マネージャーには給料が支払われ、住居が提供されるのが一般的である。

2 環境保全的管理に取り組むピーター・ナイト氏

ノーフォーク・エステートでは、穀作と畜産を組み合わせた農業が行われている。耕地では、ビール用大麦、小麦、菜種、豆類、飼料用根菜類を生産する他、短期的草地との輪作を行う。畜産については、羊の繁殖と肥育、肉用牛の肥育を行っている。ピーター・ナイト氏は、サウ

ス・ダウンズの自然環境や伝統的農業を積極的に維持しつつも生産性の高い農場経営を営むことで、数多く表彰され、また紹介された経歴を持つ。

ノーフォーク・エステートでは、以前は特段環境配慮への意識を持たない普通の農場経営が行われていた。しかし1972年に英国がEUに加盟し、農業が共通農業政策の傘下に入ると、農業の集約化が進み生け垣や茂み、空き地といったものが機械を使った大規模な穀物生産によって潰され、生物多様性を失っていった。ノーフォーク・エステートにとって顕著だったのは農地に生息する鳥類(特にウズラ)の減少であり、これは生物多様性からも、狩猟を楽しむ目的からも問題であった。1996年以前の水準以上にウズラの羽数を戻すことを主目的に、2003年に農場経営の方法を転換し、以来、国からの農業環境支払いを得つつ様々な取り組みを行っている。



ノーフォーク・エステートのマネージャーを24年間務めるピーター・ナイト氏

ピーター・ナイト氏から、取り組んでいる農業環境政策のメニューの説明を受けた。現在、農業環境支払いの中でも高度な管理を求められる事業に取り組んでおり、そこには、湿地帯での草地の管理、低窒素投入による草地の管理、緩衝帯の設置、鳥が羽を休めることができる区域の設置などが含まれる。一方、耕地を草地に転換することはしないという。耕地から草地の転換は、この地域での生物生息地の保全という視点からは最も望ましい取り組みとみなされているが、ピーター・ナイト氏は否定的だ。農業経営の効率を追求しつつ、環境保全を効率

的に行うには、耕地を維持しながらも周辺に生物生息地を数多く設置する方が良いとの考えであった。

また、ピーター・ナイト氏はサウスダウズ・ラムという地元の特産種の羊を飼育している。サウスダウズ・ラムは脂肪分が多く、市場価値が低いため飼養する農家が減っている中、地域に伝わる種の保存に貢献している。

ピーター・ナイト氏は、以前は広大な耕地であったものを、土手を作って4つに分割し、野生生物のためのコリドー（通路）を作った耕地を私たちにを見せてくれた。ピーター・ナイト氏によれば、ウズラの密度を増やすには、①生息地の確保、②餌の提供、③天敵（この場合はキツネ）のコントロールの3つの取り組みが必要であり、実際にこの3つに取り組むことで、ウサギやウズラが増えたとのことだった。このうち①生息地の確保については、農業環境支払いのメニューである緩衝帯の設置などを行う。②餌の提供については、草地に播く種に大麦を混ぜるなどの工夫をし、特に餌の少ない冬場には、造成した土手にウズラの餌を補充する容器を置いている。③天敵のコントロールについては、ゲームキーパーという狩猟担当者がキツネを撃ったり罠を仕掛けたりして天敵コントロールを行っている。



耕地の中に土手を作りコリドー（通路）にし、冬場にはウズラの餌をおく

この天敵対応については、動物愛護団体から「罠での捕獲は動物を苦しめるし、他の動物も捕まえるので問題だ」との批判も浴びている。「ウズラ猟を楽しみたいから、環境保全的取組をやっている」との見方をされることもある。



猟銃と罌を持って
ノーフォーク・エス
テートを見回る
ゲームキーパー

そもそも、ノーフォーク公のような巨大な富・巨大な農場を有する者が農業環境支払いにおいても多額の補助金を受け取ることへの批判がある。この批判についてどう思うかとの質問に対し、ピーター・ナイト氏は2点において反論した。1点目は、農場の経済活動の成果に対してはきちんと税金を払いつつ経営を成り立たせているわけであり、プラスアルファの取り組みである環境部分についてまでも自己資金だけでやるわけにはいかないということ。2点目として、ノーフォーク・エステートは1138年からの長い歴史があり、代々の所有者はその時期における「国土の管理者」として、エステートをより良い状態にして次世代に渡すことを続けてきていることである。2点目について、サウス・ダウンズ国立公園管理局の担当者からは、「ノーフォーク公は、農場での環境保全の取組の他にも、敷地内の村を昔ながらの姿に維持することに貢献している。このような歴史的経緯に基づく広大なエステートはこの一帯に多い。しかし、次第に細分化して管理を小作人が直接行うようになってきているが、そのような小作農業者の経営は苦しく、逆に環境保全型農業に取り組む余裕が無いのが実態だ」と説明してくれた。

英国のエステートは、私たち日本人には分かりにくい存在だ。この事例は、その長い歴史の流れの中で、「国土をより良い状態にして次世代に引き継いでいく」という意識が、英国の農村の環境や文化を維持・向上させていることを示している。